



作品11 歌川豊国「町家二美人図」

歌川豊国画

千葉市美術館所蔵作品展 近世以降の美術品 Vol. 2

肉筆浮世絵の美人たち

肉筆浮世絵を主とした浮世絵の歴史

浮世絵の始祖として安房出身の菱川師宣（?～1694）がよく知られます。師宣は版画をそれまでの本の挿絵から独立した作品とした点で浮世絵版画的始祖といえましょう。描かれる対象の点で浮世絵の先祖にあたるのが現在、近世初期風俗画と呼ばれるものです。近世初期風俗画は桃山時代から江戸時代初期に描かれたもので、同時代の風俗を描いたものです。京都の賑いを描いた洛中洛外図が有名です。



作品1 無款「水辺風俗図」

作品1「水辺風俗図」は近世初期風俗画の作品で、網を引いたり舟に乗ったりする人物が描かれています。このような屋外の風俗の画題では大勢の人物がいますが、描かれる舞台が庭先、建物の中と移り変わっていくにつれて人数が減少していきます。また画題も男女の出会いや遊里の酒宴が取り上げられるようになり、ついには遊女を一人だけ描く寛文美人図が作られるようになります。寛文美人図は肉筆浮世絵（版画ではない画家直筆の浮世絵）の美人画の先駆といえます。

浮世絵版画的始祖菱川師宣はまた肉筆浮世絵も多く残しました。作品4「吉原遊興図」の画家古山師政は師宣の門人の子供です。続いて懐月堂安度一門及び宮川長春（1682～1752）一門が肉筆浮世絵中心に活躍しました。作品2「吉原風俗図」は長春の弟子宫川一笑によるもので、吉原の花魁道中と茶屋の内外を描いたものです。幕府公認の遊廓であった吉原およびその遊女達はその後も肉筆浮世絵の主な画題となりました。



作品2 無款（宮川一笑）「吉原風俗図」

和
浮世絵版画は初めは墨刷りでしたが、明治2年(1765)に鈴木春信(1725?～1770)が錦絵と呼ばれる多色刷りを始めました。春信はほとんど肉筆の作品を残しませんでした。彼に続く磯田湖龍齋・勝川春章・北尾重政・歌川豊春などは肉筆浮世絵の作品を多く描きました。晩年湖龍齋・豊春は版画よりも肉筆の作品を主に描きました。

寛政年間(1789～1800)には喜多川歌麿(1753?～1806)が版画に活躍しましたが、優れた肉筆の作品も残しています。作品9「ほととぎすを見る母と子」と作品10「松茸狩り」の画家藤麿は歌麿の弟子で、肉筆の作品を多く残しました。作品14「三味線芸者」の喜多川月麿も歌麿の弟子です。作品5「男女風俗図」は豊春の弟子歌川豊広(?～1830)の作品で、ちょっと色っぽい場面も含まれています。口論をするらしい町人の夫婦もいれば遊里の男女もおり場面ごとに設定が違います。



作品9 藤麿「ほととぎすを見る母と子」



作品5 歌川豊広「男女風俗図」のうち

歌麿没後の文化年間(1804～1818)以降は版画にも肉筆作品にも葛飾北斎(1760～1849)と歌川豊国(1769～1825)が活躍します。作品13「亀戸天神太鼓橋」の歌川国直・作品15「花魁図」と作品16「芸者図」の歌川国貞(1786～1864)は豊国の弟子です。

幕末の浮世絵界では豊国の弟子国貞・歌川国芳、豊広の弟子歌川広重(1797～1858)が版画に肉筆にと活躍します。作品17「ほととぎきと洗濯女」の歌川貞景は国貞

の弟子です。作品19「婦女風俗図」は国芳の弟子落合芳幾によるものです。細かい描写で右に吉原の室内、左に武家屋敷の室内を舞台にして、着物も家具ももちろん女性もきらびやかに描いています。明治時代になってから江戸時代の風俗を懐かしんで描かれたものと考えられ、同時代の風俗を描く浮世絵がすたれつつあることを物語ります。



作品19 落合芳幾「婦女風俗図」

さて、ここまでは江戸の土地での浮世絵の歴史をたどってきましたが、京都・大坂でも上方浮世絵と呼ばれるものが描かれていました。作品20～25は上方浮世絵の役者絵です。上方では早くに西川祐信(1671～1750)が出て数多くの肉筆の美人画を残し、美人画は版画ではほとんど作られませんでした。寛政年間から浮世絵版木の役者絵が作られるようになりました。作品20「狂言尽図巻」は上方浮世絵の祖といわれる絵師、流光斎如圭の作品です。流光斎は役者絵を主に描き、一枚刷りの版画・肉筆の作品を残しました。作品20は全部で34人の歌舞伎役者を描いた巻物です。流光斎は役者の風貌を写實的に描いたことで知られます。白黒図版で掲載した場面は右から「仮名手本忠臣蔵」の勘平・お軽・由良之助で、風貌から役者の名前も推定できます。



作品20 無款(流光斎)「狂言尽図巻」

肉筆浮世絵をもっと知るための参考図書

(図書室で御覧になれます。)

檜崎宗重・他「肉筆浮世絵」全10巻

集英社 1980～1982

檜崎宗重編「肉筆浮世絵」I～III

(『日本の美術』248～250) 至文堂 1987

小林忠・他「肉筆浮世絵大観」(現在刊行中)

講談社 1994～

出品作品のうち文中でも作品解説でも触れなかった画家について以下に略伝を記します。

菱川柳谷 (作品8)

作画期は享和年間(1801～1803)から文化年間(1804～1817)。美人画に歌麿晩年の様式の影響が見られる。

野村芳国 (作品18)

安政2年(1855)生まれ。明治36年(1903)没。京都の人。師は一鶯斎芳梅(歌川国芳門人の上方浮世絵の画家)か。小林清親の影響を受けた風景版画を残す。

春光斎北州 (作品21・22)

作画期は文化6年(1809)から天保3年(1832)頃。大坂の人。師は松好斎(流光斎如圭の弟子)。北斎にも師事。上方役者絵を大成した。

柳斎重春 (作品24)

享和2年(1802)生まれ。嘉永5年(1852)没。長崎に生まれ大坂に出る。柳川重信(葛飾北斎門人)につく。幕末の上方浮世絵界で活躍。役者絵を多く残す。

光橋亭春蝶 (作品25)

作画期は文化12年(1815)から文政6年(1823)頃。大坂の人。師は春光斎北州。役者絵を描く。

浮世絵師を調べるための参考図書

(図書室で御覧になれます)

吉田暎二「浮世絵事典」 画文堂 1972

日本浮世絵協会編「原色浮世絵大百科事典

第2巻 浮世絵師」 大修館書店 1987

小林忠・大久保純一「浮世絵の鑑賞基礎知識」

至文堂 1994



作品6 祇園井特「野外遊楽図」

次回所蔵作品展と 今後の浮世絵展のご案内

千葉市美術館では所蔵作品展として3月1日より「パリの屋根」他、浜口陽三の版画作品を集めて展示します。これは3月2日から開かれる「千葉市民美術展」に合わせた企画です。

3月26日からは「大英博物館所蔵肉筆浮世絵名品展」で肉筆浮世絵を展示いたします。また4月27日からの「祝福された四季」展では浮世絵版画と肉筆浮世絵を含む近世絵画を展示いたします。

千葉市美術館・所蔵作品展
近世以降の美術品 Vol. 2

肉筆浮世絵の美人たち

1996年1月17日発行

編集・発行 千葉市美術館



作品7 水野廬朝「二美人図」



作品3 川又常行「草刈り山路」